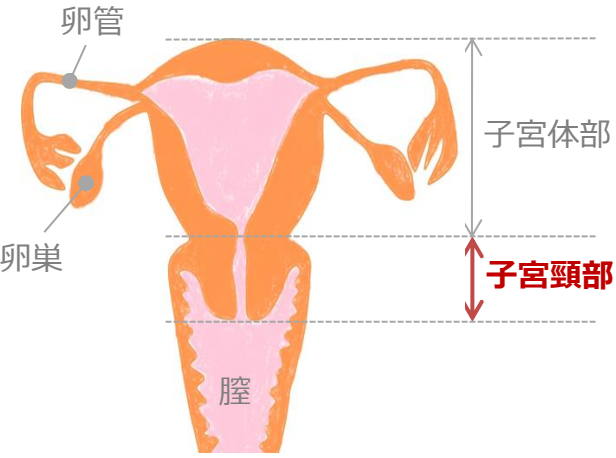
第4号 ちょっと気になる検査データ

子宮頸(けい)がん

子宮頸がんってなに？



子宮がんには、子宮の入口である頸部に発生する子宮頸がんと、体部に発生する子宮体がん(子宮内膜がん)があります。頸がんは、婦人科のなかでは最も多いがんです。

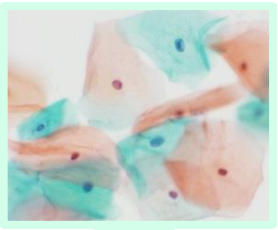
子宮頸がんの発生の多くには、ヒトパピローマウイルス(HPV)の感染が深く関わっています。HPVは、女性の8割が生涯に1度はかかる、ありふれたウイルスで、そのほとんどは免疫力で自然に排除されます。しかし、HPV感染の状態が長く続くと、細胞に異常が発生し、がんになってしまう事があります。また、喫煙も危険因子のひとつです。

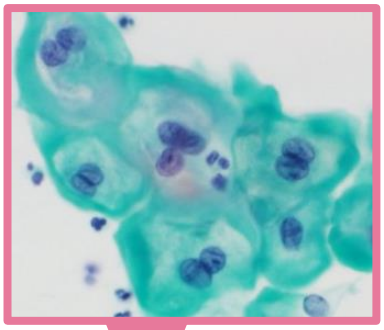
子宮頸がんは他のがんに比べ若い女性や妊娠・出産回数が多い女性に多いのが特徴で、発症のピークは30～40歳代ですが、最近では20～30歳代に増加しています。早期のうちに発見できれば、完治する可能性の高いがんであり、その後の妊娠の可能性を残すこともできますので、定期的な検診を受けることが大切です。

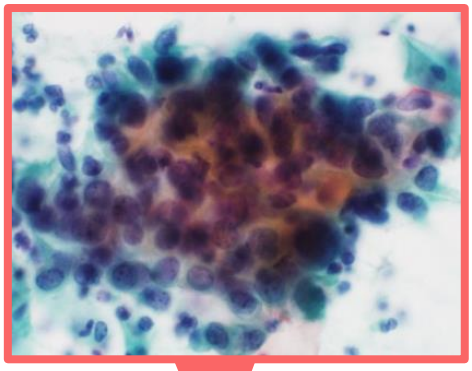
細胞診検査でなにがわかるの？

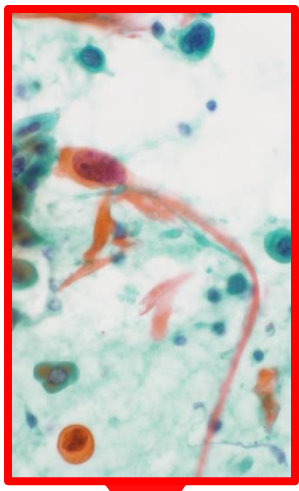
検診では、子宮頸部をブラシなどでこすって細胞を採取し、顕微鏡で**細胞診検査**を行います。

下の図のように、子宮頸がんは、前段階である異形成という状態を経てがん化します。がん細胞になる前の異型細胞を見つけることで、進行がんを予防できます。細胞診で異常が見つかった場合(陰性以外の場合)、診断にはより精密な二次検査(コルポスコピーや病理組織診断)が必要となります。









陰性	LSIL	HSIL	SCC
(正常の状態)	軽度異形成	中等度異形成・高度異形成・上皮内癌	扁平上皮癌

＊ベセスダシステム2001に準拠

HPVに感染していても、初期の子宮頸がんでも、多くは自覚症状がありません。
特に症状がなくても、20歳を過ぎたら、2年に1回の子宮がん検診受診が勧められています。
また、不正出血など気になる症状がある場合には、早めに婦人科を受診しましょう。
定期的な検診が、あなたの子宮といのちを守ります。

済生会三条病院　臨床検査科

平成29年8月